

近世末期の国土開発

～八代海二千六百町歩開発計画と鹿子木量平～

二〇一〇・一二・一一 熊本史学会秋季大会 於熊本県立図書館

内山幹生

はじめに

本報告の目的は、鹿子木量平・謙之助親子による海辺干潟二千六百町歩開発構想実体化のプロセスを明らかにすることであり、それは又、彼らによる村の再生仕法実践、国富論（富国論）展開のプロセスでもある。その中心となるべき四点を掲げておく。

- 1 下益城・宇土・八代三郡沖干潟二千六百町歩開発計画の概要
- 2 藩主の意向↓家中の救済・財政再建、その具体策として耕地拡大策
 ⇨大開発計画の必然性・背景（↓骨子3へのリンク）
- 3 惣庄屋階層による村の再生・古田の改良↓耕地開発に帰結
 ・「山川の政」不全による中流域と河口域の荒廃（排出土砂堆積による排水障害）
 ・「国益」の拡大（⇨国土開発）
- 4 鹿子木量平の開発者のセンスの教養的背景

一．下益城・宇土・八代三郡沖干潟二千六百町歩開発計画の概要

（1）企画責任者

○鹿子木量平の公職履歴抜粋（明治三十一年『故鹿子木量平神号願』より）

寛政五年十二月	鮑田・詫摩両郡郡代附横目
同 九年六月	杉嶋手永惣庄屋代官兼帯
文化元年五月	野津手永惣庄屋代官兼帯
同 五年三月	高田手永惣庄屋代官兼帯及び野津手永惣庄屋代官兼帯併勤
同 八年十二月	五町手永惣庄屋代官兼帯
同 十三年十月	郡中吟味役
同 十四年六月	野津手永惣庄屋代官兼帯 同七月大牟田新地築立根役
文政三年八月	下益城・八代・宇土三郡海辺新地築立根役吟味役兼帯
○鹿子木謙之助（鹿子木量平四男）	
文化八年十二月	野津手永惣庄屋代官兼帯

（2）開発内容

『文政三年辰九月御新地大積扣』中の「文政三年下益城・宇土・八代三郡御新地積方畧手鑑」は、鹿子木親子による三郡沖干潟二千六百町歩開発計画の見積である。この記述によれば、各々の手永より作廻に向いて植民する形態が明白になっており、古村（居村）より次・三男等の植民者を募り、新田村を仕立てる様子が窺える。その意図するところの一つは、手永内村々に年貢未済分があれば、植民地たる新田村からの産穀で充当できるからであり、古田の再生に加えて村の再建に寄与する仕法であった。

【史料①】（『文政三年辰九月御新地大積扣』（八代市鏡町鹿子木勝氏蔵）

一惣畝数貳千六百町

右之内

六百町 井手道江子諸費地、壹割延畝分共、
貳百町 野津手永居村より作廻仕可申段願出居申候分、
三拾町 種山手永右同断、
七拾町 河江手永より作廻仕候見込分、
六拾町 松山手永より右同断、
三拾町 郡浦手永より右同断、

ノ三百九拾町

但居村より受持作廻可仕分、

四百八拾町

高田手永松求广在依多人数、村々より自勘にて出百姓仕度追々願出居申候分并右外、村々より出百姓可仕候、

百町

野津手永より右同断、

貳百五拾町

種山手永四浦在并村々より右同断、

貳百町

河江手永海東谷并村々より右同断見込分、

六拾町

松山手永松合高良御領其外村々より右同断見込分、

九拾町

郡浦手永海邊村々より右同断、

ノ千貳百貳拾町

但村々にて別家等仕候者、地方拝領被仰付候へは自勘にて出百姓仕作廻可仕見込分、其外他手永よりも自勘にて出百姓仕度、内々懸合候者共有之候て、万一地方余分に相成候得は御出方無之て如何様にも作廻可仕見込に御座候、

百四拾町

野津手永漁兼之者受持可申分、

八拾町

河江手永右同断、

百四拾町

松山手永右同断、

四拾町

郡浦手永右同断、

ノ四百町

但漁兼偏之者共之儀、右御普請中相応之日雇等にて渡世仕候様に仕法を付、男女老幼共に罷出候得は却て漁業より為合に相成、其上両三年定詰程々相働候ハ、随分御百姓と成行候様之せり出も可有之、第一漁業よりは手堅農業に基申之儀に付、各別之御出方被及申間敷見込に御座候、尤如何躰にも自力にて馳罷出分は余錢貳百貫目之内より御心付錢被渡下可然見込に御座候、

【史料②】（『文政三年辰九月御新地大積扣』（八代市鏡町鹿子木勝氏蔵）

水門積

一五枚戸壹艘	龜崎江南ほ印	百間之所
一二十枚戸壹艘	マクリタヲ南り印	百間之所
一五枚戸壹艘	コナエ南ぬ印	百間之所
一三枚戸壹艘	小道越わご	八拾間之内
一五枚戸壹艘	横江北つ印	八拾六間之内
一拾枚戸壹艘	くすら江	貳百貳拾五間之内
一貳枚戸	こつかたを	百間之所
一五枚戸壹艘	揚卷たを	百間之間
一三枚戸壹艘	芝口下手	百間之内
右南分		

合拾四艘 此戸数百枚 壺枚幅八尺宛

但松角にて三通之底土臺を居其上に幅四間
半長水門幅に應合夔を入厚板にて張詰、
左右ハ割石・切石にて石垣築立中戸数に
應角石にて二重之通土臺を引、其上に水
越土臺を居本柱を建、柱之後口ニ戸数ニ
應角石にて重上ケ添柱を建、高サ之撫を取
蓋石を置、前口は戸前明磧懸迦之弁利を
付、蓋石上は内外共割石にて築立之内
心土并栗石詰之積、

※（この積前、合千五百六拾貫四百三拾六匁三分式厘）

【史料③】（『文政三年辰九月御新地大積扣』（八代市鏡町鹿子木勝氏蔵）
（途中省略）

惣合九千百拾壺貫八百七拾四匁八分
右は今度下益城・宇土・八代海邊新開御築立しら扁かた御用懸被仰付、御立會御見分
之上際目建方、且積方被仰付奉得其意候、私共立會御築立之仕法を付、様々手を詰相
しら扁申候处、右之通ニ御座候、則絵圖壺枚相済指上候、以上、

文政三年九月 小田七郎右衛門

鹿子木謙之助

郡浦新五左衛門

平野角次

松山丈八

小田藤右衛門

犬塚安太

鹿子木量平

緒方吉次

杉浦仁一郎殿

宇野騏八郎殿

奥村仙蔵殿

米良四助殿

【史料④】（『文政三年辰九月御新地大積扣』（八代市鏡町鹿子木勝氏蔵）
御新地三ヶ一所取分ヶ積（抜粋）

※一御開壺ヶ所

氷川より南太牟田御開殻樋北迄

町数七百町

右之内

一間数四千三拾九間六合

新塘分

御入目貳千百五拾五貫九百目

一同百間

但御普請御小屋并土手石手小屋床兼用之本塘分

御入目八拾九貫貳百拾貳匁四分

一水門六艘

戸数三拾枚

御入目四百六拾八貫百三拾目

一江湖筋七ヶ所 間数四百五拾間

御入目貳百貳拾四貫三百六拾目

一潮留壺ヶ所 間数四百間

御入目百八拾七貫七百貳拾目

一錢百壺貫目 土手石手諸道具并大小石船代御子や建方抱夫給共

合三千貳百貳拾六貫百貳拾貳匁四分

外に

一錢四百四拾貫九百九拾目五分五厘

右樋川より南水理一式御入目

○合三千六百六拾七貫百重貳匁九分五厘

※一御開壺ヶ所 氷川より北砂川迄

町数八百町

右之内

一間数四千七百九拾壺間六合 新塘分

御入目貳千百六拾九貫五百三拾五匁四分六厘

一水門五艘 此戸四拾枚

御入目六百貳拾四貫百七拾四匁五分貳厘

一江湖三ヶ所 間数四百間

御入目貳百八拾四貫貳百七拾八匁六分四厘

一小屋床壺ヶ所 間数百間

御入目九拾壺貫貳百四拾八匁八分八厘

一潮留壺ヶ所 間数貳百五拾間

御入目百拾七貫三百貳拾五匁

一錢七拾四貫六百五拾貳匁

土手石手諸道具石船代抱夫給共

合三千三百六拾壺貫貳百拾四匁五分

外に

一錢百拾四貫百四拾三匁三分八厘

右氷川より北砂川迄水理一式御入目

○合三千四百七拾五貫二百五拾七匁八分八厘

※一御開壺ヶ所 砂川より北貳本松迄

町数千百町

右之内

一間数貳千七百六拾三間八合 新塘分

御入目千四百九拾五貫四百三拾壺匁八分五厘

一水門三艘 此戸三拾枚

御入目四百六拾八貫百三拾目八分九厘

一江湖四ヶ所 間数四百拾間

御入目貳百四拾貳貫五百七匁七分六厘

一小屋床壺ヶ所 間数百間

御入目八拾九貫貳百拾貳匁四分

一潮留壺ヶ所 間数百間

御入目百六拾四貫貳百五拾五匁

一錢六拾五貫目

土手石手諸道具其外石船代抱夫給共

合貳千五百貳拾四貫五百三拾七匁九分

外に

一錢百八拾貫百六拾貳匁九厘 右砂川北より淺川通久具川迄水理一式御入目

○^ノ貳千七百四貫六百九拾九匁九分九厘

◎三口合

九千八百四拾七貫百七拾目九分貳厘

「表Ⅰ」 三郡沖干潟二千六百町歩開發計畫中実績分

(開發地)		(事業体)		(竣工年)		(開發面積)		(摘要)	
(開發地)		(事業体)		(竣工年)		(開發面積)		(摘要)	
百町新地	手永	文化二年	(一八〇五)	一〇一町五反	(計画外)				
四百町新地	藩	文政二年	(一八一九)	四三二町歩	(計画外)				
i 七百町新地	藩	文政四年	(一八二一)	七四〇町五反	(計画外)				
ii 鹿嶋尻御新地	藩	天保九年	(一八三八)	二一五町五反					
iii 龜崎御新地	藩	天保十年	(一八三九)	九三町八反				宇土方と共同	
iv 下住吉御新地	藩	天保十一年	(一八四〇)	九六町歩					
v 新田出新地	手永	天保十一年	(一八四〇)	一〇五町歩					
vi 松橋新開	藩	天保十二年	(一八四一)	一三五町一反					
vii 松橋新開築添	藩	弘化二年	(一八四五)	一一二町七反					
viii 網道新地	手永	嘉永五年	(一八五二)	五九二町三反					
ix 砂川新開	藩	安政二年	(一八五五)	三六五町歩					

◎開發実績合計 二四五五町九反

※龜崎より宇土半島二本松まで事業最終の開發計畫一四〇町歩ほどが存在するも未着工。

二・大開發計畫の必然性と背景

(1) 新田開發の政策的根拠と熊本藩の事例

① 耕地開發、いわゆる新田開發は、有史以前に農業が開始されて以来、その規模のみならず個人的組織的かという実行主体などの面においても、折々の社会的状況に強く影響されながら実施されてきた。

② 幕藩体制下の新田開發は、江戸開府以前の武力による支配地拡大と對極を為すもので、徳川統一政権による封建的秩序のもと、封ぜられた領国内限りに於いて農業生産基盤を平和的に拡大する方策であつた。換言すれば、境域を限定的に承認された支配地内において、領内人口との調和的な範囲で生産地面（耕地）の極大化を図ることにほかならない。

③ 新田開發によつて封土を効率的に運用するということは、近世を通じて体制維持・領国經營基盤確立のための主要な手段であつた。

④ 中央政府たる位置づけの幕府にあつては、諸藩統制の規矩ともいふべき法令を發布する立場にあり、開發関連においても、享保年間以後各種の新田開發関連法令が出されている。

【史料⑤】（『御触書寛保集成』一三一八号六九五頁・一九七六岩波書店）

○享保六年（一七二二） 閏七月發令

御勘定奉行え

一 永荒地引高之内、精に入候ハ、立返り可申事に候得共、其地主計之力にて起返候事難叶、幾年過候ても打捨置候所も有之由、ケ様之分は其村中大小百姓助合起立可候、其村計にても難成所は遂吟味御普請可申付候、

この法令からは、従来の永荒地発生防止と永荒地の再開墾を専らの目的とした新田政策から一歩前進し、年貢増徴の基本として新田開発政策を本格的に推進しようとする姿勢が感じられる。⑤ 享保七年以降の関係法令による開発対象地は、「新田ニ可成場所」として、山野・海辺等全ての未開地となっている。以下に新田開発に関わる代表的な法令を三例掲げる。

【史料⑥】（『御触書寛保集成』一三・一七号六九五頁）

I 享保七寅年七月 日本橋計え立候高札
覚

一 諸國御料所又は私領と入組候場所にても、新田ニ可成場所於有之ハ其所之御代官・地頭并百姓申談、何も得心之上新田取立候仕形委細絵図書付ニしるし、五畿内は京都奉行所、西國・中國筋ハ大坂町奉行所、北國筋・関八州ハ江戸町奉行所え可願出候、願人或ハ百姓をたまし、或ハ金元之ものえ巧を以勸メ金銀等むさほり取候儀を專一に存、偽りを以申出ものあらハ、吟味之上相とかむるにて可有之事、

一 惣て御代官申付候筋之儀ニ付、納方之益ニも不相成、下々却て致難儀候事在之ハ可申出之併申立へき謂も無之、自分勝手によろしき儀計願出ニおゐてハ取上無之候事、
右之趣、可相心得者也、

寅七月廿六日 奉行

この施策は全国に令達されたとみられ、熊本領内でも享保七年以前は新地を開いて百姓を立てることも自由で届け出も不要であったが、この高札が出た後は御郡奉行に届け出ることになった。この年以前に開発された新田を古新田、以後の開田を新田とし、区別される様になる。次は、I の法令より二ヶ月後に発令された、開発を行う場所の領有権についての法令である。

【史料⑦】（『御触書寛保集成』一三五九号七〇一頁）

II 享保七年壬寅九月 日

惣て自今新田畑可有開発場所ハ吟味次第障り無之におゐてハ、開発カ被仰付候、夫ニ付、右地所私領村附之致先ニて只今迄開発可致筋ニても、此度新田御吟味ニ附、いまた開発不仕有之候場所之分ハ山野又は芝地等或ハ海辺之出洲・内川之類、新田畑ニ可成処ハ公儀より開発可被仰付候、乍然私領一円之内に可開新田ハ公儀より御構無之候、為ニ心得此段相通し候、

九月

私領（大名領）一円の内には開発すべき新田以外は、たとえその場所が私領の村々地先で、今まで私領の領主に開発すべき理由が存在するとしても、以後は公儀より開発を命じることを通達している。開発された新田の領有に関わる問題であり、岡山藩興除新田の事例のように幕府と諸藩の間で紛争を惹起したこともあり、以後も同様の法令が發布された。

【史料⑧】（『御触書寛保集成』一三五九号七〇一頁）

III 安永六酉年九月（『御触書天明集成』二四九一号七一〇頁）

国々ニおゐて新田畑開発之儀、一領一円之内ニ籠り有之候場所は公儀より新開発不被仰付、万石以下知行所之分も同断之事候、
但一村一給ニ無之、分郷にても一給にて取廻し候内ニ有之候地所同前之事、
且村々之地先ハ不及申、山野之芝地・原地并秣場・海川の附洲・寄洲・其外右類之場所、御料ハ勿論他領之地先少にても入交有之候分は私領ニ開発不相成、公儀より新田被仰付候、尤新田畑之儀ニ付ては享保七寅年被仰付も有之候得共、猶又右之趣以来違失無之様

可被相心得候、

九月

右之通可被相触候、

ⅡとⅢは、文政四年（一八二一）、杉嶋手永惣庄屋成松古十郎の著した『三郡御新地雜記』の中に、「文政三辰年十月、御書方吟味之書拔ニ相成、御用人堀尉左衛門殿より直ニ被相渡候公儀御触左之通」という文言の後に、全文が引用されている。文政年間、西国辺境と目されていた熊本領内の一惣庄屋においても、幕府法令の周知徹底されていたことがわかる。

堀尉左衛門は藩主の御用人であり、幕府の法令に違背してはいないか、吟味を兼ねて関係手永の惣庄屋に、「公儀御触」の書拔を伝達したとみられる。

【史料⑨】（『三郡御新地雜記』熊本市城南町歴史民俗資料館蔵）

⑥ 歴代藩主の中で、海辺開発についての直接的で明確な意志を確認できるのは、細川九代藩主斉樹であり、郡代や鹿子木量平をはじめとする惣庄屋らの手になる文書類に、彼の海辺開発に対する期待などが記されている。『三郡御新地雜記』には、七百町新地の開発に至る斉樹と重臣らのやりとりが詳述されており、ほぼ同じ内容が荻角兵衛（昌国）の「己巳雜録」中、「八代之御新地御築立之事」にみられる。

【史料⑩】（荻角兵衛「己巳雜録」『新開新地』所収 九州大学附属図書館蔵）

文政三年七月十一日、御家中え手取米増可被仰付と之君上難有思召にて、沢村宇右衛門殿え新地御用懸被仰付候付、同月十三日右之面々え宇右衛門殿於宅被申聞候趣、拙者儀一昨日御用之儀有之被召出候付、早速午前え罷出候處御膝元近く被召寄、近年御物入打続御稼手向甚被成御差支候間、御家中え手取米減被仰付置候ニ付ては一統及難渋候、殿、逐一被為及聞召、兼々御苦惱ニ被思召上候事ニ候、

家老沢村宇右衛門は、藩主斉樹より家中士への手取米を増加させるようにとする意図のもと、新地御用懸を命ぜられた。これより以前、文化十年（一八一三）、斉樹は藩主直書をもって非常儉約令を示達して家中の手取米を減じ、翌年に五ヶ年間の格別儉約を命じている。この儉約令は奏功せず、手取米減などを含め、文政二年よりさらに五ヶ年間の非常儉約令延長を触れ達した。

翌年の斉樹下国の際には、家中の困窮いよいよ顕著となる。七月十三日沢村家老は、自宅に藩主御用人、御郡目付、奉行、宇土・下益城・八代の各郡代、そして新地築造の責任者として鹿子木量平親子を招き、藩主の苦悩を訴えた。

久振ニ被遊御下国候間（前年御滯府）、少は御家中も甘も居か申哉と被為思召居候處、御通筋家數々々垣廻等益及大破居、且当月は御下着後初て之式日ニ付、定て出仕之面々も大勢ニて可有之と被為思召居候處殊外少人数ニて至て淋敷、畢竟ケ様ニ有之候と申は御渡方等充分ニ無之處より之儀と被思召、上、甚以被遊御心痛候間、何卒今少シ家中者共渡方優ニ為取候仕法は有之間敷哉と被仰付候、（「己巳雜録」）

斉樹は、参勤前と比較して少しは家中の寛ぎもみられるだろうと思っていたが、いざ帰国して通筋の家々を眺めると、垣廻りを補修する余裕もないようで荒れ果てていた。おまけに帰国後初めての式日には、多くの家臣が出仕するだろうと思っていたところ、あまりに少人数で寂しい限りである。斉樹はそれらの理由を、家中士の手取米が少ないことにあると考えた。対処を命じられた沢村家老は、次のように言上した。

如何躰ニ勘考仕候ても、当時之御繰合ニて御本方よりと申候ては、唯今之上ニ被増下候仕法と申は、一切見込無御座候、

乍然、昨年於八代御築立ニ相成候四百丁之御廻沖手・氷川尻ニ懸候七百丁、また氷川尻宇土二本松ニ懸候て千九百町大新地を被遊御築立候ハズ、両三年中ニて手取増被仰付候

丈は御倉入可有御座奉存候、（「己巳雜録」）

既存の四百町新地の地先干潟に七百町新地を造成し、さらにその隣から宇土半島二本松に至るまで堤防を延長し、新たに一千九百町歩余の大開発のもくろみを開陳する。これに対し斉樹は、「是に過候良策は有之間敷、是ハ天之與と可申候」と述べた。沢村家老は、七月十三日、彼の屋敷に参集した人々へ、斉樹の言葉として以下のことを伝え、一同の奮起を促した。

1. このような大目論見は、本来衆議に諮るべきであるが、そうすれば色々の申し分も生じ、事が成らなくなる。よつてわざと衆議にはかけず独断で沢村に申し付ける。
2. 種々の論争が引き起こされるのは必定であるが、この点においては心配無用である。志を堅く持ち、是非存念を達するべきである。

3. 心力を尽くして新地造成を成就し、一刻も早く家中の者どもの困窮を救済せよ。

こうして七百町新地は、藩主の並々ならぬ後援を受け、宇土・下益城・八代三郡海辺新地開発計画の先頭を切つて文政四年（一八二一）十一月に潮留された。斉樹の意向は、文政九年に彼の後を継いだ細川斉護にも踏襲され、近世末期熊本藩大干拓時代の掉尾を飾ることになる。

【史料⑪】（「奉願寛」天保十一年八月 『天保覚帳』六―三一―一八）

僉議

今度南北海邊ニ於ゐて新地場御見立ニ相成、御手当之都合次第開發被仰付候御主意は改申上候ニ不及候得共、右は根元寛永

御入國之砌は御國中惣人数式拾貳万三千人餘、田畑六万四千町、當時は惣人数五拾九万三千人、田畑八万貳千町餘ニ而人数は三拾七万餘相増、田畑は纔壹万八千町之増ニ而其外土貢不鈎合ニ而零落ニ陥候ケ所も段々有之候得共、御免下反別下等取扱之備無之、且請免不幸ニ而老歩半米之備手薄武文藝御倡ニ付而御取賄之手當鉄炮洲御屋敷御難渋等不得止儀も有之、御国民撫育として開發被仰付段、被奉達

尊聰ニも候、末之儀ニ付此御主意貫不申候而は難相成、右之稜々中々一通之備ニ而は取賄出来可申様無之、左候得は聊ニ而も入目錢相減、開之場所数相増候より外無之候間、是迄之新開は塘手成就之上ニ而御賞美之外ニ御用懸之御惣庄屋以下えは開畝受持被仰付来候得共、是は二重之御賞美ニ相當候付、此節より地方請持之方は被差止、

（付札 本行地方受持被差止候ハ、御賞美は御手厚可被仰付と奉存候）

且是迄は地底錢迎は所々召上候得共、此節御打立之御新地は所柄御救手永開杯とは前文之通訳も違候事ニ付、相應の地代錢上納敷又は寸志夫を以塘手築立候、地方請持可被仰付候哉、

※寛永九年（一六三二）

総人口 二二万三〇〇〇人余

田畑面積六万四〇〇〇町歩

天保十年（一八三九）

総人口 五九万三〇〇〇人余

田畑面積 八万二〇〇〇町余

この史料は、藩主の海辺開発に対する基本的認識を示し、それはまた広く藩庁役人や会所の役人にまで浸透していたことをあらわしている。天保期当時は、寛永年の細川氏肥後移封当時と比較すると、人口増加ペースで二・六倍強となっているが、田畑面積では一・三倍弱の伸びにすぎない。人口増加と耕地面積増加趨勢の不均衡が村方零落の大きな原因であるとし、「御国民御撫育として開發被仰付段被奉達」と記されている。

但し、右の人口統計が正鵠を得ているかという問題もある。この数字は、幕府へ報告された全国人口調査の数字であり、概要こそわかるものの問題点も多い。意図的な過大申告や過少申告があった。幕府直轄領以外、調査対象は各藩に任されており、乳幼児や被差別階層、寺社仏閣関連人口の扱いが各藩で異なり、除外人口が多い欠点もあつて、一〇%―一五%程度上乗せ

して見ておく必要があるという（鬼頭宏「明治以前日本の地域人口」）

一方、史料中の田畑面積も、個々による小規模新田開発の捕捉難・隠し田畑の存在もあって、正確な実態をあらわしているわけではない。しかし、総人口と全田畑面積の対比および、それらの増加趨勢の外観を把握するうえでは有効である。

（参考）

〔表Ⅱ〕 熊本領内人口推移（『熊本藩年表稿』より）

享保十一年（一七二六）	男三〇万四三三一人	女二万五万四八一九人
	合計五万九一三二人	
安永三年（一七七四）	男二八万九七六二人	女二六万一五人
	合計五万九六八七人	
文化元年（一八〇四）	男二八万一一六三人	女二六万二三〇人
	合計五万四一三九三人	
文政五年（一八二二）	男二九万八二一七人	女二七万九五七一人
	合計五万七七七八人	
天保五年（一八三四）	男三〇万四〇九五五人	女二八万九五六六人
	合計五万九三六六一人	

（2）開発の顛末

八代郡鏡村沖より氷川河口に至る七百町新地から北上し、宇土郡永尾村二本松に至る千潟千九百町歩余の干拓地を造成する大開発計画であり、基本計画は鹿子木量平・謙之助親子の構想に拠っている。彼らが沢村家老に進言し、計画推進の同意を得た後、藩内事情に支障のない時期を選んで着工することになった。その後、天保七年（一八三六）には、この大計画の一環である新地の開発願が、種山手永より氷川尻に一五〇町歩、下益城郡の五手永より河江手永海辺に三〇〇町歩、平準方より氷川尻に三〇〇町歩が各々提出されている。これらに対し、またもや築立に支障のない時期になれば許可するという決裁が下され、一旦不許可となった。

三年後の天保一〇年、鹿嶋尻御新地二一五町五反、亀崎御新地九三町八反と、次々に開発が成就し、最終的に安政二年（一八五五）砂川新開の三六五町歩まで、計画面積千九百町歩のうち、合計八件で一七一五町四反余の干拓地竣工をみる。

次の史料は、七百町新地以降の開発地を二千町歩と定めて想定した計画生産高である。計画面積を千九百町歩と表記がある一方で、「田畑貳千町程」と書かれており、本件積書（文政三年辰九月『御新地大積扣』）が、開発計画と実態の誤差を考慮した大枠の積算書であったことを物語っている。全体の撫反で反当壺石五斗五升を打ち出しており、これは、海辺干拓地特有の豊かな地味を前提とした評価にほかならない。

【史料⑫】

覚

一田畑貳千町程

御新地分

此出来米三万千石

但田畑上中下位之撫反壺石五斗五升右米の見込、

壺万七百八拾石

上納米

貳万貳百貳拾石

作徳米

一四百拾町八反六畝拾貳歩

三軒屋御開其外上畝物二相成可申分、

此出来米七千八百六石余

但上中下位之撫反壺石九斗右米之見込、

千三百六拾三石四斗三升 床上納分

千百壺石余 上畝物米

上畝下り

五千三百四拾壺石五斗七升 作徳米

○上納米合

壺万千八百八拾壺石余

此高

百石高拾七石手永之積に

六万九千八百九拾石余

同式拾七石手永之積に

四万四千石余

以上、

《海辺開発推進の原動力》

鬼頭 宏（上智大学）によると、人口は基本的に食糧とエネルギー、場合によって水に規定されるといふ。食糧といつても、実際には技術や制度・生活様式などが食糧資源の利用方法や加工の水準を決め、食糧の供給量を左右するのは環境と技術、社会制度であるといふ。その意味では、人口がどこまで増えるかは、社会が持っている食糧供給量に規定されることになる。農業技術の改良で食糧増産は可能であるが、人口増加が更なる段階に移行するには時間経過が必要であり、その移行のきっかけは人口の圧力であると指摘する。人口圧力が高まって今までのやりかたでは対処できなくなると、否応なく新しい技術を受け入れ、一生懸命働いて生産力を引き上げるという。このような環境や社会構造の変化から影響を受け、大規模な海辺開発が目論まれてきたともいえる。海辺開発による土地の創造、つまり生産基盤および環境資源の創造は、人口増加の圧力という視点からも説明可能であろう。

三．村の再生仕法と国土開発

海辺干拓は、隣接する古村の湿田対策として有効に機能した。古村とは、既存の居村のことで新田村に対する呼称である。湿田とは、恒常的に水をたつぷり含んだスポンジのような状態の田圃をいう。高低差のない底平地、つまり標高ゼロメートル地帯に多くみられ、現在でも川の周辺や海辺に多く分布している。八代郡野津手永鏡村とその周辺地域村々の田圃もそうした場所であった。

野津手永西部海辺村々における湿田は、広大な干潟に隣接しており、地底そのものに水を湛え、排水の行き場が無い状態にあった。巨大なスポンジと化した田圃の水を移動させる手段の一つが干潟の干拓である。湿田の地先に堤防を築き内側を干し上げると、その乾燥した大地に湿田の水気が吸収されてゆく。百町新地は、まさに湿田解消の着想に端を発した海辺開発であり、その後四百町新地・七百町新地と連続する開発にも同様の趣旨が窺われる。海辺干拓は、まさに水理の延長としての側面があったのである。

（1）百町新地の例

八代郡野津手永の零落から再生に至る間の詳細は、鹿子木量平の筆になる天保三年、『邦君積善記』、同四年の『御積善奉納記』、会所文書などを合綴した文政十一年の『野津手永零落

御救一卷』に余すところなく記されている。以下にまとめておく。

野津手永は郷村組の時以来、道前郷。道後郷、小犬郷に分かれており、三郷とも山在の村々と組み合わされていた。その後、三郷の西部海辺に村々の偏在が始まって野津手永十八ヶ村となり、山川の政行われず山林・丘陵の余産を失ったところで享保十七年（一七三二）の大飢饉に遭遇し餓死者が出て潰れ竈も多かった。その後、惣高一万七六七〇石余、新地諸開の田畑一六〇町歩余は、植え付けが出来ず、藩庁より「種粃被渡下、作子・奉公人之給銭・作食共に被渡す下」され、残らず毛付し、稼業を立てるように命じられている。鹿子木は、この時の事情を次のように理解していた。

【史料⑬】（鹿子木量平『御積善奉納記』八代市鹿子木勝氏蔵）

弥増御国制御不足打重り、御家中御扶持方迄被渡下候由、其分も米無之、粟・麦・大豆等被渡下候由、其時分被召仕候御役人より及承候、

爾来、野津手永の村々は七〇年余にわたり、通算およそ三万二〇石余の年貢を滞納していたが、その分をそのまま御救米に下し置くという配慮で、村々は維持されてきた。しかし、鹿子木が文化元年（一八〇四）に杉嶋手永より野津手永へ所替になる前年の享和三年、請免を命じられている。

当時の八代郡代松村英記は、鹿子木に御救米が打ち切られたことを告げる。農民逃散の兆しも顕れ、潰れ地に成りかねないと判断し、鏡町の地先に新地を築立て、そこから上がる産穀で従来の御救米に代えるべきだという。鹿子木はこの時のことを次のように記している。

【史料⑭】（鹿子木量平『御積善奉納記』）

依之幸平（※量平のこと）少年よりの志、頭為御国名分差入、候覚悟此節と心得、野津手永之微力にて百町新地築立、七十年来之御救米に代エ可申と男謙之助え謀候、勿論同心す、

斯くして鹿子木量平年来の信条である、「国家の大益」実現のため、子息謙之助を伴い百町開の開発計画が画策される。鹿子木親子が無主悪田と化した三四五町七反余の土地を分析したところ、全体に地高となつて水気を地底に貯えているため、深沼となつて田下駄や田舟を使用しなければ耕作不可能であった。

根本原因をつきとめたところで濬筋と各地点の高低を測量したところ、海側の方がはるかに低いことが判明し、多数の通水路を掘削することで排水を図ることにした。この工事は成功し、沼田から水が抜け落ち、牛馬で耕すまでに回復する。これが野津手永再生への第一手で、第二手は、それを確固たるものに仕上げた百町開の開発である。

百町開は単純な干潟の開発ではない。以上のような古田の再生、すなわち深泥田から水を抜く仕法とからめた排水対策としての開発であった。水抜き井手を多数掘削すると共に、地先干潟に堤防を築き、内側の水を干し上げることで古田の水塊をそこへ誘導したのである。鹿子木は藩国家の経済は、国土すなわち生産基盤の拡大にあると考えており、それが国家の大益に結びつくという。このことは、天に代わって誠を工（勤）むること、すなわち藩主に対する「天職之勤」として、少年時代より鹿子木量平の胸中に根ざしていたものである。

（2）山川の政

I、木場作批判

鹿子木は、『勸農富民録』乾之巻、項目「山川」の冒頭で、「民を富すこと国家の大本也、国家の富ハ山川の政、治るに在リ」と述べた。その根本は、「山茂り、川深く成る様の仕法」にあるという。また、「上古ハ天地自然の水理なりしか、御治世久しく行れ浦々山々の奥までも年

を逐ふて人数多く成るゆへ、山ハ絶頭まで開き明け、海ハ干潟を尋て開き出し、川ハ堤防にて築せばめ人作の地となりしなり」と分析する。

古代中国、禹の水理を例示して「山に随ひ木を伐り、道を通し、其山の高きものと其川の大なることを以、これか紀綱と為す」とし、続けて、「しかるに右に記せし如く人作の地となりし本をかんごふるに治水の事を職する人有て高山・大川の紀綱を見極め、洪水の分量を考へ、山々を開かせ堤防を営みたる、水理にあらず」と結ぶ。つまり、山里を開くものは、そこに住まう者の私的な知恵であり、川が浅くなつて川下の害に成る事を知らないと批判する。

さらに、堤防を営むものは各々の利益のために行い、川向こうに害のあることなど考慮することはないという。鹿子木自信も、飽田・詫麻・益城・八代の手永会所に勤務した経験から、「下民の私智、大に行れ山川の政を害せし所多し」と結論した。山の政が的確に執行されなければ、年を逐つて川が浅くなり、水勢・水量共に増し、堤防の嵩・塘腹を改善しても抗しきれるものではない。

山の政が行われていない具体例として、木場作の問題を提起する。木場作のために山の大木が焼き払われている状況を山民の私欲として糾弾し、「川々の平水涸れ、養水不足する所あり」といい、「国ハ必山川に依る」とした。これは、山林の保水力に注目した見解で、現代に至るも治山・林政の最重要課題の一つとなっている。山の保水力に言及し、奥山の森林地域と木場作地域とを対比して論じている部分を摘記しておく。

【史料⑮】（『勸農富民録』乾之卷 八代市鹿子木勝氏蔵）

遠く慮を施し、深く古今を事を勘考し、古より有来りし大なる奥山を視るに朽木・枯枝・枯葉の類落重りて土の有所を知らず、雨水是に濡り保つて流すこと速ならず、木庭開の落水はいと速かにして、土砂・大小石を洗ひ落す水勢にくらへたらむときハ、分量其半にして川に入るへし、則洪水を救ふ徳をそなへたり、扱又土砂の交さる水なれハ川筋に居揚・干出等置くべき様なく、海口に洲を置ずして却て川筋を挟り、木庭水の居揚・干出等を流す也、又水漬りの時其害至て薄し、

鹿子木所論の特徴は、ことごとく理詰めで展開されている点である。史料⑮の見解も『勸農富民録』中に例証されている。

◎飽田郡谷尾崎村と同池上村の事例

飽田郡谷尾崎村の内、茂り山より雨水の流れ出る谷川があり、又、池上村の方からも高橋川の水が溢れ登る所がある。茂り山に源を発する流水は、澄み水となつて下るが、高橋川からの流水は濁り水になつて登るという。この上下する水は谷尾崎と池上の田圃で会合し、茂り山からの水は田に入り、その田は程なく繁茂する。一方、高橋川からの濁り水が入る田は不毛となり、二つの川流の利害明白なることを見て、茂り山の徳を感じたと記す。茂り山からの澄み水は、朽木・枯葉等の堆肥化した堆積物の層を通ること、その栄養分を川に注ぎ込むのである。

Ⅱ. 山川の政と海辺開発

人口の増加によつて山々の奥まで開発されるようになると、保水力が落ちて河川の排出土砂が増え、中流域から河口域にかけて土砂堆積が顕著となる。鹿子木自身は、木場作の規制を含む治山の必要性を強調するが、これは大命題であり、完璧な対応が可能とは思っていない。河川の底が浅くなり、増水時期には、下流域に洪水などの深刻な問題を引き起こす。河口域の土砂堆積は、菊池川・白川・嘉瀬川・緑川・球磨川など熊本領内の代表的な河川のみならず、小河川の河口に至るまで、恒常的な浚渫を必要とした。

この問題に対する鹿子木の結論は、「山の中にも数多の谷・峰有、其催合水落着る所ハ谷川の如くに成、土砂・大小石洗ひ出す水勢瀧の如にして、小川ハ突埋め、大川に干出を居揚、洩を瀬

となし海に洲を置き、水理を妨る事人力の及所に非ず」として、治山・林政による治水の重要性を主張しながらも、人力によってコントロールする限界を吐露する。

上流域から河口域に運ばれる土砂の問題は、治山・治水技術の発達した現代においても最重要の課題である。まして、近世の土木技術で対応出来る領域は限られていた。鹿子木は、河口域に排出される河川土砂と、波浪によって運ばれる潟土の堆積により、相乗的に発達する干潟を新開地として利用することにしたのである。

四・鹿子木量平における開発者のセンスの教養的背景

(1) 鹿子木量平の「教養」的部分に影響を与えた人々

幼児期より少年期にかけては、池田春丈に習書・讀書を学んだとあり、その後北垣一蝶・佐田谷山に師事し儒教的教養を積む。成年期に後の川尻町奉行境野嘉十郎に弟子入りし、武士的な教養とその生き様に影響を受けたとみられる。時習館時代の高本紫冥にも教導を受け、島原温泉岳崩落後の高潮被害収拾では、様々なアドバイスを受けたとの述懐もある。

地方行政の実務は庄屋役・会所役人時代の経験から学んだとして、その入り口は五丁手永惣庄屋時代の永井宇七兵衛との邂逅であり、民の父母として富民に務めるとする発想は、永井譲りであった。藩庁との関連では、郡代時代の杉浦仁一郎、大奉行嶋田嘉津次らとの親交があり、民生を含め、行政上の、より高度なステージで政策的知識を涵養していった。

(2) 鹿子木量平の主要著作

著作は数多いが、活字化されているものは、『勝國治水遣』、『水理考』、『邦君積善記』、『御積善奉納記』ほか数点にすぎない。その原因は、彼の著作が鹿子木家から門外不出であったわけではなく、遺された膨大な史料群の中に埋もれていたからと思われる。注目すべき主要著作を掲げておく。特に②③④は、彼の勸農施策・地方行政・富国論の展開・農政思想が凝縮されており、刊本化が期待されているところである。

①『邦君積善記』

熊本における加藤清正の水理（水利）土木事業を顕彰し、加えて鹿子木量平自らが関わった治水・土地改良・海辺開発実績の詳細を記す。特に百町から四百町新地、七百町新地の築立に至る諸事情や、工事の経過を記した部分は注目される。

②『勸農富民録』乾之卷・坤之卷

勸農と富民がテーマであり、治民・斂法・民生・治村大意など、熊本領内に普遍的に適用されるべき施策が、独自の理論展開を以て描かれている。本報告との関連では、乾之卷中の「山川」を取りあげた。鹿子木著作の中でも白眉の書である。

③『教戒記録』

鹿子量平から四男謙之助に宛てた書簡を整理したもので、過半は、親子の往復書簡の体裁を整えている。謙之助が野津手永惣庄屋に任用される前後の時期とみられ、文政年間の七百町新地竣工後にまとめられた。惣庄屋職執行の要諦と心構えが説かれている。

④『天職提要記』

前出『教戒記録』の各論的展開がみられる。より具体的な事項が記されており、惣庄屋の職務を民の父母と位置づけ、村・手永を経営論的視覚から論じていることに新味がある。『勸農富民録』および、『御積善奉納記』等の記述と重複する部分も少なくない。

まとめ

干拓は総合的な水理の一環という側面があり、水理の先に干拓があった。鹿子木量平は、「成長する干潟」と「海辺低平地の排水障害」を分析し、その解決策として干潟に塘を築き、内側を干し上げて古田の過剰な水を吸収させたのである。こうして創成された新たな海辺開発地もまた、遠からず排水障害にみまわれることになり、その堤防の外側にさらなる新開地を開発する必要性に迫られる。下益城・宇土・八代三郡干潟二千六百町歩干拓計画は、耕地拡大を最大の目的としつつも、副次的に八代郡鏡村地先から汀線上に沿い、宇土郡松合村地先までの全域をカバーすることで、内陸側の湿田化した古田の再生対策として機能したのである。

【引用史料・参考文献】

- 鹿子木謙之助『文政三年辰九月御新地大積扣』（八代市鏡町鹿子木勝氏蔵）
- 鹿子木量平『邦君積善記』（右 同）
- 鹿子木量平『御積善奉納記』（右 同）
- 鹿子木量平『警戒記録』（右 同）
- 鹿子木量平『天職提要記』（右 同）
- 鹿子木量平『野津手永零落御救一卷』（右 同）
- 鹿子木量平『水理考』（右 同）
- 校訂本田彰男『水理考』（九州農業史史料第二輯九州大学農学部農業経済学教室一九六五）
- 鹿子木量平『勸農富民録』乾・坤（八代市鏡町鹿子木勝氏蔵）
- 明治三十一年『故鹿子木量平神号願』（右 同）
- 天保十一年八月「奉願寛」（『天保寛帳』六―三―一八永青文庫寄託熊本大学附属図書館蔵）
- 成松古十郎『三郡御新地雜記』（熊本市城南町歴史民俗資料館蔵）
- 荻角兵衛「己巳雜録」（『新開新地』所収・九州大学附属図書館蔵）
- 細川藩政史研究会編『熊本藩年表稿』（熊本大学附属図書館一九七四）
- 高柳眞三・石井良助『御触書寛保集成』（岩波書店一九七六）
- 高柳眞三・石井良助『御触書天明集成』（岩波書店一九八九）
- 鬼頭宏「明治以前日本の地域人口」（『上智経済論集』四一卷一―二・一九九六）
- 鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』（講談社学術文庫二〇〇〇）

